
金婚式

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金婚式

【Nコード】

N2402J

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

金婚式を迎えた老夫婦。曾孫達が二人に贈るものは。同じ題名
の名曲からヒントを得ました。

第一章

金婚式

老夫婦と言つてもよくなった。リチャード「オーコン卿と妻のメアリーはもう結婚して随分と経っていた。

「もうどれだけになるかな」

「五十年よ」

微笑んで夫に告げるメアリーだった。その顔は年老いてはいるがそれでも非常に美しい。まさに美しいままで老いた、そんな顔であった。

「そうか、もうか」

「ええ。五十年です」

「長かったな」

リチャードは妻のその言葉を聞いて穏やかに微笑んだ。安楽椅子に座り白い部屋の中で黒いズボンと赤いチョッキ、それに白いシャツを着てたたく彼の姿は実に余裕のあるものである。彼もまたその美男子のまままで老いたといつてもいい、そんな趣であった。

「いや、短かったかな」

「短かったつていうのかしら」

妻が応えたのはそちらだった。

「やっぱり」

「五十年という歳月を考えたら」

リチャードはその歳月についても述べた。

「長いんだろぅがね」

「それでも感じるのは、なのね」

「短かったな」

その五十年を振り返つての言葉だった。

「本当にな」

「そう言われてみればそうかしら」

それにメアリーも頷いた。

「やっぱり」

「五十年。これで」

また言うリチャードだった。

「金婚式か」

「そうだったわね」

言われて気付いたという感じのメアリーだった。

「そういえばそうね。金婚式ね」

「そうだな。それでだけれど」

「二人でささやかなお祝いをしようかしら」

こう考えるのだった。

「二人で。何か食べて」

「それじゃあローストビーフがいいな」

リチャードは微笑んで妻に告げた。

「メアリーの焼いたな」

「それでいいの？」

「ああ、それで頼むよ」

それを頼むのだった。

「それとあとは」

「ワインはシャンパンにしようかしら」

「そうだね。お祝いだしね」

それでいいというのだった。

「ワインはそれで」

「それで他には」

「後はケーキを買って」

次にはそれだった。確かにささやかな祝いであった。

「それで二人でささやかに祝おうか」

「静かにね」

「それでいい」

静かに述べたりチャードだった。

「二人で祝ってそれで終わりで」

「そうよね。ただそれだけでね」

こう言い合いささやかに祝うつもり二人だった。しかしそれはたまたま二人の家に遊びに来ていた曾孫の一人が聞いた。彼はそれをすぐに兄弟や従兄弟達に話したのだった。

男もいれば女もいる。しかし皆まだ子供達だ。一番上で十六といったところか。その彼等がその話を聞いて困った顔になっていた。

「えっ、二人だけで祝うって」

「それだけ？」

「それだけで終わらせるっていうの？」

「それだけでって」

「そうみたいなんだ」

それを聞いた子が皆に話す。

「ひいお爺ちゃんもひいお婆ちゃんもね」

「寂しいな、それは」

「そうよね、やっぱり」

「それで終わりだなんて」

「ささやかだなんて」

「五十年なのに」

彼等にとってはそれはもう想像もできないまでに長いものである。それこそ生まれる遙か前である。その長さを思っただけで話すのだった。

第二章

「それで二人だけなんて」

「僕達が祝ってあげたいのに」

「そうだよね」

「折角だから」

口々に言い合う。しかしだった。

実際に何をするかというと彼等はすぐには思い浮かばなかった。

誰もが困った顔になってしまいそのうえでまた話すのであった。

「とはいっても」

「何をするかだけけれど」

「何がいいかな」

「それよね」

具体的に何をするかということになって戸惑うのだった。一人がここで言った。

「プレゼントならどうかしら」

「プレゼント？」

「金婚式の？」

「そう、それはどうかしら」

言ったのは小さな女の子だった。顔のそのそばかすが可愛らしい。

「プレゼントをしてお祝いするっていうのは」

「それいいかもな」

「そうよね、それだったら」

「それでいく？プレゼントで」

とりあえずはだった。それで決まったのだった。二人に対してプレゼントをする、それでおおよそのことはとりあえずではあるにしろ決定した。

だが決まったのはそれだけだった。やはり具体的なことは決まっていない。その為彼等はまだ話をしていくのであった。

「それで何をプレゼントしよう」

「ええと、何かいいのある？」

「料理でも作る？」

一人が言った。

「何かお菓子でも」

「ケーキを向こうで用意するって言ってたよ」

最初に皆に話したその子がこのことを言うのだった。

「確かね」

「えっ、じゃあケーキはなし？」

「お菓子は」

「お料理自体も」

「あとお酒もね」

それも駄目だというのだった。

「それも向こうで用意するんだって」

「じゃあ何もプレゼントできないの？」

「そうよね。ケーキもお酒もっていったら」

「それだったら」

これでお手上げになるかと思われた。しかしであった。

ここで一人がまた言うのだった。その言ったことは。

「音楽はどうかしら」

「音楽？」

「音楽をって」

「そう、音楽をね」

こう言うのである。

「それでどうかしら」

「そうだね、それだったら」

「いいかしら」

「確かに」

皆音楽と聞いてそれで納得したのだった。少し考えてそのうえで
の言葉だった。

「音楽なら僕達でもできるし」

「それならね」

「プレゼントできるし」

「それじゃあ」

ここまで話してだった。彼等は次にその曲について話をするのだ
った。

「曲はどうしようか」

「ああ、それだったらね」

眼鏡をかけた女の子が言ってきた。

「いい曲があるわよ」

「いい曲って？」

「どんな曲なの？」

「そのままひいお爺ちゃんといいお婆ちゃんのためにあるような曲よ」
にこりと笑って皆に話してきたのだった。

「二人の為にね」

「二人の為に？」

「それってどんな曲なの？」

「その曲はね」

女の子は皆にその曲について話をはじめめる。皆はその曲のことを
聞いたうえであることをはじめた。そうして自分達の曾祖父父母の金
婚式に備えるのだった。

第三章

そしてその金婚式の日だった。二人は自分の屋敷の庭でそのささやかな式をはじめようとした。ローストビーフにケーキ、それにシヤンパンを出してだ。祝おうとしていた。

「じゃあ今からね」

「はじめましょう」

緑の庭は日の光を受けて爽やかに輝いている。花は薔薇が咲き誇りその中でささやかな祝いをはじめようとしていた。しかしそこであつた。

二人は庭の中の白い木の席に着いていた。そこで今から祝おうとしていたのである。

「ひいお爺ちゃん、ひいお婆ちゃん」

「いいかな」

「僕達も入れて」

「お祝いに」

こう言つてだつた。彼等はやつて来たのであつた。

「あれっ、御前達」

「ここに来たの」

「そうだよ。ひいお爺ちゃん達のお祝いにね」

「金婚式にね」

「そうだよ」

こう話してそれで場に着くのだった。二人の前に。

「金婚式おめでとう」

「それでお祝いに」

「僕達からプレゼントがあるんだ」

「プレゼントって?」

「何なの?」

二人は曾孫達の言葉にまずは怪訝な顔になつた。

「それで一体」

「何が」

「聴いて」

一番年長のその彼が二人に告げた。

「僕達のプレゼント」

「是非ね」

「その為に用意したんだよ」

「プレゼントを聴いてって」

「何を？」

二人はそれを聴いてまた怪訝な顔になった。一体何か全くわからないのだった。それでその顔で首を傾げさせながらまた曾孫達に問うた。

「聴くプレゼントって一体」

「何かしら」

「これだよ」

ここでまた曾孫の一人が言ってきた。

「この曲聴いて」

「二人の為にね」

「どうぞ」

ここで皆それぞれ楽器を取り出して来た。一番年長の彼が彼等の前に出て指揮棒を出してきた。そうしてそのうえではじめた曲は。

「この曲を」

「私達の為に」

それは金婚式という曲だった。それを二人に対して奏でたのである。二人はその曲を聴いて。

「どうか、だからか」

「金婚式だから」

「それでなのね」

「うん、そうなんだ」

演奏はすぐに終わった。曾孫達は二人に顔を向けて答えるのだっ

た。

「二人の為にね」

「練習したんだ」

「練習してか」

「私達の為に」

「だから」

それでまた話すのだった。

「よかったかな、これで」

「この曲で」

「喜んでくれた？」

「うん」

最初に応えたのはリチャードだった。

「有り難う」

「有り難うって」

「よかったの」

「ああ、とてもよかった」

その穏やかな笑顔で曾孫達に答えたのだった。

「とてもな」

「有り難う」

メアリーもこう言ってきたのだった。

第四章

「とてもよかったわ」

「よかったの」

「そう、とても」

やはり彼女も笑顔だった。穏やかで満ち足りた笑顔で曾孫達に言うのだった。

「温かかったわ」

「温かいつて？」

「音楽が」

「そうよ。温かかったわ」

また言うメアリーだった。

「とてもね」

「音楽が温かかったの」

「今の曲が」

「そうよ。それに」

その満ち足りた笑顔のまま言葉を出すメアリーだった。

「皆の心がね」

「僕達の心が」

「温かかったんだ」

「ああ、そうだ」

まさにそうだと答えたのは今度はリチャードだった。

「そうだよ。御前達の心が温かかったんだよ」

「僕達別にね」

「そうだよね」

皆で言うのだった。

「ただひいお爺ちゃんといいお婆ちゃんの為について思っただけで」

「本当にそれだけで」

「別に何も」

「それなのよ」

しかしメアリーはまさにそれだというのだった。

「だからなのよ。温かいのよ」

「だから温かいって」

「どういふことかな」

「わからないわよね」

「そうだよね」

曾孫達には誰もわからなかった。そうしてさらに言い合っただった。

「ただそれだけなのに」

「他にないのに」

「何で温かいのかな」

「それなんだよ」

だがりチャードはまた孫達に言っただった。

「だからなんだよ」

「だからって」

「何か余計にわからないけれど」

「本当にそれだけだったのに」

「私達の為にとって考えてくれたのよね」

首を傾げさせたままの彼等にまた話すメアリーだった。

「そして演奏してくれたわね。皆で練習してそれで」

「うん、そうだよ」

「それはね」

このことについてはありのまま話すことができた。まさにその通りである。

「だから。それがなのよ」

「温かいんだよ」

メアリーもリチャードもそれだというのだった。

「その私達のことを考えてくれた心がね」

「温かいということなんだよ」

「そうなんだ」

「これがなんだ」

彼等にはわからないことだった。誰もがきよとんとした顔になつて二人の話を聞いていた。

しかしだった。その中で。二人は曾孫達に言うのだった。

「それじゃあ皆で」

「パーティーにしましょう」

二人だけの祝いは止めるのだった。それをするといふのである。
「皆でな」

「さあ、お菓子を出してきて」

「お菓子!？」

「お菓子を皆で食べるのね」

「そうよ。あとジュースもね」

それもだというメアリーだった。

「出してそれで皆で楽しみましょう」

「うん、それじゃあ」

「皆で」

満面の笑顔で応える曾孫達だった。そうしてそのうえで皆楽しむのだった。二人のその幸せな金婚式を。皆で祝うのであった。

金婚式 完

2009・11・25

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2402j/>

金婚式

2010年10月8日15時24分発行